

伝 統

田 中 さ や

此の度、ハンドボール部高津クラブの部誌創刊号が発行されるにあたり、何か書くようにとの仰せでしたので、年々の発展して来た高津ハンドボール部の十余年間を振り返って見て、思い出されるまゝに書き並べさせていただきます。

高津高校に私がお世話になりましたのは昭和二十四年四月です。このクラブ創設者へ高津三期生の運動クラブと比べて、ハンドボール部だけが、三年生の部員は一人もなく、二年生で盛んでした。しかし、高津の優等生・模範生で占められたクラブで、外から眺めていた私の目には、大へんなごやかなクラブに写っていました。当時の高津の体育科は、清水谷との交流で、畑中先生へ現高津非常勤講師の清水谷へ行かれ、清水谷から見た守山先生へ現城東高守友先生も二十四年五月に黒山高校に転勤され、森岡先生は定時制の専任となられ、岡本先生へ現岡安証券社長は御自分の会社でお忙しくして無給の講師とな

られ、時たまに一寸顔を見せられる位で、授業の持ち時間は勿論なく、従って実際の授業をするのは、四月に共に転勤して来た村田先生へ現三国丘高校、大坂ハンドボール協会常任理事と私の二人だけという有様でした。ハンドボール部としては、村田先生という、実に良い指導者を得たわけだったので、前記のようないきなり、村田先生もお忙しく、つぎなきりのコーナーなど、とても望むことはできません。この位で、よくまとまったチームでは、こうしてハンドボール部の活動が開始された。翌二十五年早々に跡部先生を迎えましたが、その四月に村田先生は在取わず、一年で三國丘高校へ転任されてしまいました。その後、島田先生へ現阪南高校へ、荒木先生、そしてその翌年に鳴川先生へ現大阪外大講師の、お見えになり、ハンドボール部の顧問をされたので、鳴川先生はバレー部の顧問部と兼任され、バレー部の協会の方で仲々お忙しい身分でした。

以上のようにハンドボール部としては創設以来指導者には恵まれませんでした。しかし、次から次へと上級生から下級生へ、先輩から後輩へと自分達の手でクラブを造り上げ、自らの手で指導して来たわけです。

これは一朝一夕に出来るものではありませ
んが、過去十余年間の皆々様の努力により
造り上げられて来たクラブの伝統の良さ、
即ち、高津の自主的な本場の良さが、クラ
ブ発展の上にも発揮されたわけでありませ
。夏の合宿も創設当時のキャプテンの橋本
さん等、社会人となられてからモタ方会社
が済むとすぐに学校に来て、夕食后消灯時
間までを利用して、ルールの研究や練習法
についての話し合い、朝は五時から出勤まで
の時間を利用してのコー子等、寸暇を惜し
んでの指導の姿も何年間か見かけました。
女子のハンドボール部が、八期生の徳美
さんや北野さん達の手によって創られる事
になった年から私は、ハンドボール部と直
接関係するようになり、それ以来、過
今日までの間で最も印象深い思い出は、過
本陽之助さんをキャプテンとした昭和三十
年の夏、楠木通りを中寺町に入ったお寺で
の合宿です。

その年の四月、関学に入学以来本格的な
ハンドボールの練習を始められた櫻本秀一
郎さん、津田さんの兩人を中心として、山中将
司さん、岡部正文さん等多数の先輩による
コー子で、過本・佐竹・金沢・大西・今村
・小林・木下・吉川の二年生に、梶原・高
田・神元・林の一年生を混えての合宿。

午前四時五十分、コオッキョーの津田さ
んの声に一斉に跳び起きる時から、一日の
生活がはじまります。寝具の片付け、部屋
の掃除、ユニフォームに着換え、洗面具を
待って、シューズをばいて表の道路に並ぶ
までわずかに十分、そして午前五時、ツアイ
トシの掛け声と共に町に走り出し、数軒の
駄足をして学校の運動場へ、体操をし
て、馬跳、うさぎ跳等、からだじゅうが痛
くなるようなこと、多い早朝の練習です。
入部して日の浅い吉川さんや林さんの脚
がカチカチになって膝が屈らなくなったの
は、四日目ごろからでした。林さんの脚が
固くなって、おさえても少しもひっこまな
いので、コテッキンコンクリートのよう
に固い山といった所から、テッキンと呼
ばれるようになり、現在のニツクネーム、テ
ッチンが始まり、現在のニツクネーム、テ
ッチン、五時半頃にはいつもさまたて運動場にお
見えになって、まがらない足に手をみさえ
て努力している傍まで来て、コカンバレ、
カンバレ、と声を掛けて励まして下さ
ったものです。

こうして七時半にオ一回の練習を終えて
から洗面、ついで朝食、午前九時より、
再び練習開始、十二時の昼食後は、教室や
運動場の木陰等、それ〴〵涼しい所を求め

ての昼寝、三時より三回目の練習開始、
 この午後の練習は、全期間中合宿を共に
 して下さった先輩に、次々と激励に見える
 先輩方も加わって、時には生徒とコトが
 同数位になる時もある。練習でした
 。六時頃やると練習を終えて、学校の食堂
 で夕食をすませて宿舎中寺町のお寺へ帰り
 ます。この帰りがまた大変なのです。わす
 かの道程を一時間余りもかかって帰る。よ
 ごれたユニフォーム姿で、重い足をひきづ
 りながらとぼくと帰る姿は今思い出し
 てもみじめなものです。一番困ったのは上
 本町四丁目の電車筋を横切る時です。わす
 かな青信号の間をわたってしまわねばなら
 ない事です。こうしてやっとお寺に帰り、
 直ちに浴場に行き、風呂足や肩を揉み、あ
 たりたにめします。八時半頃より研究が始
 まります。ひきつづいて反省会です。一年
 生から順に全員が一日の生活を振り返って
 見て感想を発表するのです。反省会を終え
 ると直ちに寢床を取ります。壺り沃山のス
 ケジュールで九時半には就寝したのです
 がいつも消灯は十時近くなっていました。
 昼間の激しい練習に消灯後の話し声など、
 どこにも聞けない。今身体をよこしたか
 と思ふとたちまち気が持たない寝息がスヤク
 と聞かれます。唯私一人だけが目を覚まし

ている。こんな忙しい一日の生活の中にも
 宿舎では暇をみつけて岡部さんから数学の
 宿題を教わったりして、いる人も何人かあり
 ました。
 み互にいたわり合い、助け合って規律正
 しい生活を一週間続けた事によって、技術
 ・体力・精神力・チームワーク等は言うに
 及ばず、人間性としての多大の収穫を得る
 事が出来ました。
 一年生の梶原さんは合宿を終えて帰る日
 の二日が一週間ほどとも良い生活をした。一
 日一日が充実した無駄のない生活でした。
 今まで家では朝も遅く起きていたのが、何と
 なすことなく一日を過ぎていたが、よい習
 慣がついた。早く目がさめるようになった
 から、これから家に帰ってからも早く起き
 て勉強しよう。充実した一日が過ぎて能率
 が上がるだろう。充実した一日が過ぎて能率
 顔で話したものでした。
 その後、先輩の方々の御指導によって、
 高津ハンドボール部はだん／＼隆盛の途を
 たどり、昨年独乙遠征の日本代表選手を送
 る室内競技が府立体育館で催された時の全
 大取選抜選手に、我が高津クラブからも
 肉西学生ハンドボール連盟理事長の中江さ
 ん(同大)、浅野さん(京大)の二人が選ば
 れたのを初めとして、辻本・高田(府大)

服部(関学)・石崎(京大)・林(歯大)さんと現在も各大学で活躍している優秀な人々が多くあります。

最近はお野さんにとても熱心に、毎日のように指導していただき居りますが、今年には学生の部員数が少ないので、一寸寂しい感じがします。十余年間の先輩方の努力によって築き上げられた立派な伝統を傷つけまいように、いや、ますます「発展・繁栄」を望むように現在の在学中の人々の努力を望むと共に、高津クラブ(O.B.O.G)の隆盛をお祈り致します。



送球

小西 英博

ドリブル……パス……ドリブル……シュート……グラウンドのはしからはしへ、一つのボールを追ってひたはしる。頭にはボールと敵味方の動き以外は何もない。体力と技術のあらうん限りを出しつくしての何十分間の緊張と躍動とは青年の心をひきつけずにはおかない。ハンドボールクラブの依頼でこの文を草し一つ、心はその頃のグラウンドを走りまわっている私の姿を追っているのを感じる。その頃——昭和十四年——は「送球」と言っていた。今日のハンドボールが日本へはいつてきてまだ間のない頃であった。送球の祖国ドイツからチームが来日して親善試合をしたりしていた。当時の高津中学校は、時の校長羽生(はにゅう)隆先生の教育方針に副って、対外試合をする運動部は全くなく、そのかわり全校生徒が、バスケットボール、バレーボール、フットボール(サッカー)、テニス、送球という五つの種目のどれかに属して週一回、所定の曜日の放課後運動をするることになった。先生方もその中のどれかかの指導に当たられた。一年は月曜日、